

第52回

国立がん研が初推計 全国8万7000人

日本では、晩婚化に伴い出産年齢が上昇したため、子供が成人する前に、がんを発症する患者さんが増えています。

がん対策基本法やがん対策推進基本計画には、がん患者の家族に対する相談支援が重要だと書かれていますが、その対象は主に配偶者ら成人であって、子供についてはほとんど注目されていませんでした。

しかし、患者さんにとって、成人前の子供は一番の心配のタネで



がんの親を持つ子供の支援策を話し合う金沢医科大学病院関係者=同病院

れています。その中に、子供自身が情緒や行動に問題があると認識する一方で、親はほとんど気づいていないという報告があります。子育て中の患者は闘病中もよい親であり続けたいと思っています。子供には余計な心配をかけたくないから、がんとは伝えていないといふ方も少なくありません。でも、それは大人が困らない方法を選択しているのかもしれません。子供は、一番大切な親に変化が

**「神様が怒つてがんに」
低学年に多い特有思考**

また、「自分が悪い子だったから、神様が怒つて、お父さん、お母さんをがんにした」とか、「親の言いつけを守らなかつたから、親を重い病気にしました」と思い込む傾向があります。小学校低学年に多く見

あれば、いち早く察知します。がんは治療時間が長く、患者さん本人の体調や容姿の変化などが起き、子供に病気を隠し通すことは難しいといえます。

親が病気になつたことを察知した子供は誰にも話さず、一人で悩んでいます。しかし、がんの正しい知識は持ついません。がん対策推進基本計画はがんの正しい知識の教育を求めていますが、まだ緒についたところです。

一方の子供はテレビやネットの情報から、想像を膨らませていきます。実際は早期発見のがんで完治の見込みが高いのに、親ががんになつたことだけで、「お父さんはがんで、もうすぐ死んでしまう」と、がんイコール死に結びつてしまふケースがあります。

こうした子供たちは、家庭でも学校でも、誰にも相談できず、孤立してしまいます。必要以上に不安や罪悪感を抱きながらも、それを周りの人気につかれないようにしていることがあります。自分がいろいろと質問をして親を困らせたりしないよう、親を気遣う子供もいます。

子供に病気についてきちんと説明しないでいること、人格形成の重要な時期に、周囲の人と信頼関係を築けないまま大人になつてしまふという大きな代償を払うことになりかねません。

子供にがんであることを伝える時、3つの要点があるといわれます。

①病気になつたのは誰のせいでもな

あり、子供自身も親の病氣に最も影響を受ける年代だといえます。昨年11月、国立がん研究センターが18歳未満の子供を持つがん患者とその子供について、年間に新たに発生する人数や平均年齢を発表しました。こうした調査結果が公表されるのは初めてです。

調査結果によりますと、18歳未満の子供を持つがん患者は全国で年間、5万6143人います。子供の数は8万7017人です。患者の平均年齢は男性が46・6歳、女性が43・7歳。子供の平均年齢は11・2歳でした。子供の63%が小学生以下でした。

子供にどう伝えますか？

がんの親を持つ12歳以下 石川で年間400人

もし、あなたががんを患った時、家族にどのように伝えますか。

まして、家族にまだ幼い子供がいた場合はどうしますか。

「子供に伝えるべきか、伝えるとしたら、どのように伝えるか」。迷うところではないでしょうか。

金沢医科大学腫瘍内科学講師の久村和穂先生に聞きました。

| 今月の回答者 |



久村 和穂

金沢医科大学
腫瘍内科学講師
同大学病院緩和ケア委員会委員
社会福祉士

この調査結果を基に、石川県内のがん患者の子供の数を推計する

と、1年間にがんの親を持つ子供が約640人発生し、そのうち約400人が小学生以下となりました。毎年、これだけの数の子供が増えているわけです。

この調査結果を基に、石川県内のがん患者の子供の数を推計する

と、1年間にがんの親を持つ子供が約640人発生し、そのうち約400人が小学生以下となりました。毎年、これだけの数の子供が増えているわけです。

察知し一人で悩む子供

親はほとんど気づかず

こうした未成年が抱える問題についての研究は、海外では結構、進んでおり、内向性が強まつたり、男の子は孤立化しやすいなどの調査結果が発表されています。国内でも少しづつですが、研究が行わ

るこの病気は「がん」ではなく「病気」とい

う言葉を使うと、風邪のように移

るものと考えてしまい、自分も重い病氣にかかるのではないかと心

配する子供もいます。

親の病氣はがんであり、移る病氣ではないから、今まで通り、抱きついても大丈夫だよ、と説明す

ることが大切です。

病氣を含めて、親と子供のコミュニケーションが十分に行われて

いる家庭では、子供はどんな状況でも親が誠実に向き合ってくれる

という安心感を持ちます。そこか

ら、親子間の信頼関係がより深くなっています。

多くの研究者は、そうした親子関係の基盤を持つ子供は「親ががんになった。死ぬかもしれない」という難局に直面しても、家族や

周囲の人々に支えられながら、何とか自分なりの対処方法を見つけ、成長を遂げると報告しています。

支援策を立ち上げ 来年度目指し準備

金沢医科大学病院では、院内の緩和ケア委員会に「子育て中のがん患者」とその子供の支援プロジェクト」を立ち上げました。米国で開発されたCLIMB(クライム)というプログラムを導入して、子供たちの苦痛、悩みを軽減しようと試みます。

看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーなどの多様な職種で構成されたメンバーで取り組んでいます。このプログラムは2010(平成22)年に日本版が完成し、関東地区のがんの拠点病院などで導入されていますが、北陸など日本海側ではまだ実施しているところはありません。

クライムは親の病気に関連するストレスへの対処能力を高めるのが目的です。精神疾患や心身症を治すための心理セラピーではありません。精神面の健康の増進が目的で、困難な状況をどうやって乗り越えるかを学ぶことが狙いでいます。

支援の対象は親ががんであることを知らされている小学生と親です。参加する子供は週1回、2時間のプログラムを6週連続で受講します。メンバーは固定で、回を

夏休みキッズ探検隊 2016

7/9(土)
〆切

日時	7月30日(土) 10時~15時
場所	金沢医科大学病院
対象	小学1~6年生(定員10人)
内容	①がんについて学ぼう! ②病院内を探検しよう!など
参加費	無料(昼食・おやつ付き)
申し込み	金沢医科大学病院がん診療連携拠点病院
問い合わせ	担当事務局「夏休みキッズ探検隊」係 ☎ 076(286)3511 内線8514

選んでの受講はできません。

各回のテーマや活動内容は上の表のとおりです。クライムが大切にしているのは、参加した子供たちがそれぞれ共通点を見つけ、孤独感を軽減し、仲間を作ったり、自分の気持ちを自由に表現することです。

今夏に「探検隊」開催 「治療に頑張れそう」

クライムは2017年度スタートを目指しており、その準備段階として、昨年8月に北國がん基金の助成で「夏休みキッズ探検隊」を実施し、今年も7月30日に開催します。

探検隊には、クライムプログラムに組み込まれたがん教育と心理教育を凝縮しています。昨年は手術室の見学や化学療法を使う点滴の実習もを行い、看護師が1対1で付き添い、子供が恐怖心を抱かないよう留意しながら進めました。中でも、手術室は怖がるかなと病気のことを話しやすくなりましたが」との感想や、保護者から「子供ががんのことを聞いてくるようになりました。私も治療に頑張っていけそうです」と前向きな言葉が返っていました。

探検隊の実施を通して、私たちが

学んだのは「患者さんの支援なしには、子供の支援にたどりつけない」ということだ。「子供さんの成長は患者さんを支える大きな力になる」ということです。ぜひ、一人で悩まず、この夏の探検隊に参加していたただければと思っています。